

中等部第2回

国語

平成31年2月2日実施

50分

2019年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕〔二〕があります。
 - 二、解答時間は五十分です。
 - 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
 - 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いて
ください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

安原慎人（俺）は、武蔵映像大学（ムサエイ）の四年生。映画監督になる夢を果たすため、地元である青森の大学を中退して、ムサエイに入学した。学年のみんなで撮る卒業制作の映画として、プレゼンテーションの末、自分の作品が選ばれ、監督として映画を制作中である。青森にいる母は、一年前に癌が発覚し、そのときすでに余命一年を宣告されていた。以下は、なかなか会いに行けない入院中の母親のもとへ久しぶりに帰った場面である。

この週末は、準備期間の合間のわずかな中休みだった。本当なら脚本の修正と絵コンテを描く作業をしなければならぬのだが、今を逃すと映画が完成するまで母さんに会うことはできないだろう。

今は七月。映画の完成は十二月。母さんがそれまで生きていられるかどうかは、わからない。

「俺、監督やるんだ」

「へえ、そうなの」

① 母さんの怠そうな声に、わずかに張りが出る。

「監督って、一番偉いんでしょう？」

「偉いっていうか、みんなを動かさないといけないから、いろいろ大変」

俺が監督として上手くやれているかと言えば、それはNOだ。こちらからプロデューサーを頼んだのに、北川は呆れているだろう。こんなことなら自分が監督をやれたらよかったのに。そう思っていたら、どうしよう。

いや、きっと、間違いなく、思われている。

「マキが監督した映画、観られるんだ」

「完成は年末だから、観せられるとしても、お正月かな」

「大丈夫。お母ちゃん、映画好きだから。お正月まで待つてる」

「じゃあ、お雑煮、食べながら観ようか」

自分が撮るのは『終わりのレイン』という作品で、ストーリーはこんな風で、優秀なスタッフが集められたから、みんな頼りになる。そういえばこの前こんな映画を観た。半年ぶりの母さんとの会話は、映画のことはかりだった。②
せつかくだからと、DVDを一本観た。

「でも」

映画のタイトルが二十インチのテレビ画面に表示されたとき、母さんがぼそりと言った。

「やっぱり映画は、大きな画面で観たいね」

あんたの映画も、映画館で観てみたいなあ。くすくすと笑う母さんに、釣られて笑った。笑わずにはいられなかった。

「じゃあ、頑張つて、早く監督にならないとね」

こんなこと、北川の前じゃ絶対口に出せない。「お前には無理だ」と、北川が胸の内ですう気がして。でも、やっぱり、言わずにはいられない。

「マキの映画も桜ヶ丘シネマでやったら、お母ちゃん嬉しいな」

「大学生の卒制だよ？ 無理に決まってるじゃん」

一応、卒制は大学の近くの映画館を貸し切つて上映会を行う。一般客も入れる。だが、母さんがここから新幹線に乗って観に行くことは叶わないだろう。

「わかつてるよ。でも、やっぱりあそこが一番落ち着くじゃない。昔から行ってたから」

桜ヶ丘シネマ。病院に来る途中に通り過ぎた、今にも潰れそうな、町で唯一の映画館。

俺と母さんの休日の楽しみといえば、桜ヶ丘シネマで映画を観ることだった。二人分の映画料金はちよつと高いから、ポップコーンは二人で一つ。席の間のホルダーに入れて、二人で食べながら映画を観る。

母さんの体調のこと。余命一年を宣告されて、その「一年後」がもう眼前に迫っていること。母さんのいなくなったからのこと。とうの昔に両親が離婚し、母子家庭で育つた自分ももうすぐ独りになること。そういった差し迫った現実、二人とも、言葉にしなかった。

選んだのが「一分に一回笑える」と木脇が力説していたコメディ映画だったのが、すべてを物語っている気がした。

夜七時を回った頃、病室を出た。ロータリーまで行くと、坂道を上って来た市営バスが病院の前で止まり、降車口が開いた。

見知った顔が、ステップを踏んでバスから降りてきた。

③ 思わず、その人物から顔を背けた。このままバスに乗って、知らない振りをして帰りたい。心からそう願ったのに、こちらを威圧するような低く険しい声で名前を呼ばれてしまった。

こうなったら無視はできない。乗車待ちの列から外れて、バスを降りてきた中年の女性の元へと歩み寄った。背負ったリュックがもの凄く重くなってしまった気がする。

「帰って来てたのね」

二宮の叔母さんは、顔の半分を歪めて、嫌なものでも見た顔をした。四年前、俺が地元の国立大学を中退してムサエイを受験し直した頃から、こうなった。

母さんの妹に当たる二宮の叔母さんからすれば俺は、女手一つで育ててくれた母親を捨てて、国立大学を卒業して母に楽をさせてやるという親孝行もせず、映画監督なんて子供みたいな夢のために東京へ行ってしまった、許せない甥っ子なのだ。

「いつまでこっちにいられるの」

嫌味を言われるのを覚悟して、「明日までです」と絞り出すように答えた。

「映画だ何だと言って碌に帰ってこないんだから、たまにはもう少し姉さんを安心させてあげればいいのに」

叔母さんの手には、大きなトートバッグ。中身は母さんの着替えだろうか。入院中の母さんの面倒は、ほとんど叔母さんが見てくれている。俺の父はとうの昔にどこかに行ってしまったし、母さんの両親はとつくに他界した。

「すみません。大学の卒業制作で、ちょっと忙しくて」

「卒業制作っていったって、どうせ映画撮ってるんでしょ？ 母親と映画ごっことどっちが大切なの。大体あんたの行ってる大学、潰れるってネットのニュースに出てたわね？ そんな大学出てまともに社会人になれるわけないじゃない。世間はね、あんたが思ってるほど優しくないから。だから叔母さんは反対だったのよ。大学やめて東京行くなんて」

口を開きかけ、そっと閉じた。腹の中は人並みに熱くなっている。北川だったら、即答したのだろうか。自分がどんな気持ちで映画を撮っているのか、どれほどの覚悟を持って三年半過ごしてきたのか。

そういったものと人の命を天秤にかけて、答えに窮するのをせめるなんて卑怯だ。そう、言うに違いない。

「慎人、あんた、大学卒業したらどうするの」

その質問に喉が押しつぶされたように苦しくなり、先程母さんと一緒に観たコメディ映画のワンシーンが、どうしてだか脳裏を過ぎる。

「まさかまだ内定も何ももらってないのっ？」

叔母さんが一歩、詰め寄ってくる。

「現場に、入ることになってます」

「現場あ？」

「大学の先生の紹介で、四月から始まる、映画の現場に」

「それ、給料いくらなの？ 正社員なの？ 福利厚生は？ ボーナスは出るの？」

④ ああ、駄目だ。話を通じるわけがない。

映画の世界というのは、二宮の叔母さんが生きるような普通の世界とは違うのだ。新卒採用とか、正社員とか、完全週休二日とか、福利厚生とか、ボーナスとか。そんな普通の生き方からは外れてしまう世界なのだ。

叔母さんが求めているのはきつと、映画ごっこは大学時代のお遊びとして卒業と同時にすっぱりやめて、社員に（できれば正社員に）なって、固定給をもらって、年に二回ボーナスをもらって、母さんを安心させる。仕事を送りをして、親孝行をする。

そういう、普通の世界を生きる親思いの息子を求めているのだ、この人は。

バスの運転手が「出発致します」とアナウンスをした。これ幸いと、バスに向かって「すみません、乗ります」と叫んだ。

「ちよっと、まだ話が——」

二宮の叔母さんの方は見ず、乗車口に走る。ドアが閉まり、バスが走り出してからも、しばらくそちらを見られなかった。

バスが病院の敷地を出て、坂を下って海岸沿いに出て。そこまで来てやっと、俺は座席に腰を下ろした。リュック

クサツクを足下に置き、大きな溜め息をつく。

しばらく、そのままだった。自分の足下を睨みつけながら、何も考えないように眉間に力を込めていた。あまりにも長いことそうしていたから、ついには頭痛がしてきた。

顔を上げると、桜ヶ丘シネマの目の前だった。ほんやりとした外灯に照らされ、公開中の映画のポスターが浮かび上がる。ポスターは新しいのに、ぼろぼろの映画館の前に飾られていると大昔の映画のようだ。

およそ四年前。俺が、通っていた国立大学を辞めて映画の勉強をしたいと母さんに打ち明けたのも、ここだった。母さんの好きな俳優が主演を務めた話題の映画を観た、直後のこと。

※ エンドロールが終わり、館内が明るくなり、疎らに入っていた観客がぞろぞろと出て行く中、大学二年生だった俺は言ったのだ。

「母さん」

空になったポップコーンのカップを握り締めて、スクリーンを真っ直ぐ見つめて。

「俺、大学辞めたいんだ」

俺が通っていたのは、地元の国立大学の理工学部だった。偏差値も高く、受験のときは半泣きになりながら勉強した。二部屋しかないアパートで、卓袱台の上でもらい物の参考書をひたすら解いた。「お母ちゃんがいると集中できないでしょ」と、母さんはいつも隣の部屋にいた。テレビもラジオもつけず、本を読んで過ごしていた。

地元の国立大学を出れば、県内の有力企業に就職できる。そんな安定した幸せな未来を、俺は自ら捨てようとしていた。

「東京の大学で、映画の、勉強がしたい」

俺の言葉に、母さんは驚かなかった。俺と同じようにスクリーンをぼうっと見つめて、「あらそう」だなんて

言うのだ。

あらそう、だなんて。

「そう思っちゃったなら、しょうがないね。マキ、映画好きだもんね」

嫌だ嫌だって思いながら大学行くの、大変でしょ？ そう言う母さんは、今日の夕飯の献立でも決めるみたいな口振りだった。

⑤ 母さんは怒るだろうか。悲しむだろうか。呆れるだろうか。エンドロールが流れている間、ずっと考えていた。でも薄々わかっていった。母さんはそのどれとも違う反応をすると。わかっていたから、きつと俺は言い出せたのだ。

「学費とか、生活費とか、全部、自分で何とかする」

「肝心の映画の勉強が疎かになっちゃったらいけないから、無理しちゃ駄目よ」

母さんは許すのだと。母さんは、映画監督になりたいという俺の夢をわかっているのだと。

「マキが映画監督になって、撮った映画がここでやるってなったら、一緒に観に来ようね」
そんな風に、俺の夢を応援すると。

「そのときは、ポップコーンもジュースも、一人一個ずつ買おうね」

俺の持ったポップコーンのカップを指先でツンと突いて、母さんは笑った。

「二つもいらないよ」

首を横に振ると、下唇が震えた。⑥ カップを握り締めて、両足に力を込めて踏ん張った。カップに皺が走って、歯を食いしばらないと嗚咽が漏れてしまいそうだった。でも、そうするわけにはいかなかった。

「ポップコーンもジュースも、二人で一個でいいよ。二人で分ければいいよ」

俺はこれから、母さんをこの北の寒い街に一人残し、東京へ行く。大学を卒業してからも、東京で映画を撮り

続ける。年に数回しか帰省しなくなる。母さんが日本人女性の平均寿命まで生きるとして、あと四十年ほど。母さんに会う回数も、もしかしたら四十回程度になってしまうかもしれない。

大学を中退したいと告白した日、そんなことを考えていたつけど、バスの中で肩を震わせた。四十年どころじゃなかった。母さんは俺がムサエイに入学して二年と半年後、俺が三年生のときに、癌で余命一年を宣告されたのだから。

バスは中心街へと入った。桜ヶ丘シネマはとつと見えなくなった。街で一番栄えている場所だというのに、シャッターを閉めてしまった店ばかりが目立つ寂しい景色が、流れては消えていく。

バスの前方の電光掲示板に、実家の最寄りのバス停名が表示された。降車ボタンを押すと、聞きなれた音が車内に響く。乗客は、俺以外に二人しかいなかった。

バスを降り、実家である築三十年の二階建てアパートを目指して暗い路地を歩いた。もう随分離れたところまで来たというのに、桜ヶ丘シネマに飾られた映画のポスターが頭の中から消えない。ずつとずつと、視界にこびりついたまま、離れない。

桜ヶ丘シネマは、近々潰れるだろう。

母さんとあそこで映画を観ることは、もうない。

俺の映画があそこで上映されることも、ない。

(額賀滯『完パケ!』講談社)

- ※絵コンテ……脚本をもとに、登場人物の動きやカメラの位置などを、場面ごとに絵で示したもの。
- ※北川……大学一年時からの仲の良い友人であり、ともに映画監督を目指すライバル。優れた才能を持っており、卒業制作作品を決めるプレゼンテーションでは、みな、北川が選ばれると予想していた。その北川に、楨人は作品のプロデューサーを依頼した。
- ※木脇……同級生。卒業制作映画『終わりのレイン』では助監督を務めている。
- ※窮する……行きづまって困る。
- ※内定……就職先が、正式決定の前に、内々に決まること。
- ※福利厚生……会社が、従業員やその家族に対して、健康や生活の安定・向上を目的に行うさまざまな取り組み。
- ※エンドロール……映画の終わりに表示される、出演者や製作者・監督など、関係者の名前の一覧。
- ※嗚咽……声をつまらせて泣くこと。

問一 線部(a)(b)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①「母さんの怠そうな声に、わずかに張りが出る。」とありますが、このときの「母さん」の心情や様子を説明したものとして、もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 楨人がやっと映画監督をするのだと思うと、ホッとする気持ちが強くなっている。
- イ 楨人がうれしそうに話すので、体調が悪いが、無理をして元氣に見せている。
- ウ 楨人が、映画監督をすることを聞いてうれしく思い、少し心がはずんでいる。
- エ 映画監督をするようになるとますます忙しくなると、楨人の体を心配している。
- オ こんなに早く夢がかなったことに対して、驚いて、自然と声が大きくなっている。

問三——線部②「半年ぶりの母さんとの会話は、映画のことばかりだった。」とありますが、このときの二人の状況や心情を説明したのもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 久しぶりに会ったので、どうしてもお互いが好きな映画のことが話題になってしまい、尽きることはないと感じながら会話を楽しんでいる。

イ 二人が好きな映画のことを楽しく話して、死が近づいている母のことやこれからの現実的なことは話さないようにしている。

ウ 病気でつらい思いをしている母が少しでも楽しいと感じてくれるように、母の好きな映画の話題をたくさんしようとしている。

エ 離れて暮らしているため、東京での「俺」の映画の勉強についてなかなか共有できないので、ここでたくさん会話をしようとしている。

オ 他に話さなければいけない大切なことがあると分かっているながら、母の前でその話はするまいと決心して違う話ではぐらかしている。

問四——線部③「思わず、その人物から顔を背けた。」とありますが、「俺」が、叔母さんに会うことを憂鬱に思う心情がもっともよく表れている一文を本文中から抜き出し、初めの五字で答えなさい。

問五——線部④「ああ、駄目だ。話を通じるわけがない。」とありますが、「俺」はなぜそのように思ったのですか。本文中の言葉を用いて、七十字以内でまとめて説明しなさい。

問六——線部⑤「薄々わかっていった。」とありますが、「俺」は、何を「薄々わかっていった」のですか。本文中の言葉を用いて具体的に説明しなさい。

問七——線部⑥「カップを握り締めて、両足に力を込めて踏ん張った。」とありますが、このときの「俺」の心情を説明したのもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母につらい思いをさせてしまうことになるのが分かっているにもかかわらず、夢を認めてもらったことがうれしくて叫び出したくなるような思いを必死でおさえている。

イ 許してもらえないかもしれないと思った自分の夢を明るく認めてくれた母に対して感謝するとともに、絶対映画監督になってその恩を返そうと、強く決意している。

ウ 自分の夢がかなうということは、自分を信じてくれていた母を一人きりにしてしまうことだということに気づき、悲しさのあまり涙があふれそうになっている。

エ 母をおいて東京に出ていこうとする「俺」に対して、怒ることもせず、その夢がかなったときの話をしてくれる母の明るさに心が救われたような気持ちになっている。

オ いろいろな犠牲を必要とする自分の夢を笑って応援してくれる母の思いにふれ、こみあげる感情を抑えきれず泣いてしまいそうになるのを必死でこらえようとしている。

問八 この文章の内容や表現の特徴についての説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えな
よ。

- ア 母の愛情が回想場面を通してより深く感じられ、母を失うことや母との思い出が詰まった映画館が
なくなることへの「俺」のさびしさが情景描写と合わせて描かれている。
- イ 母との会話を通して「俺」の心情が少しずつ変化していく様子と、母の死をどうしても受け入れら
れない心の迷いや悩みが具体的に描かれている。
- ウ 母と息子の仲の良い関係が、会話文や回想場面を通して強調して描かれることで、このあと訪れる
母の死が「俺」に深い悲しみを与えることを予測させている。
- エ 映画に熱い情熱をかたむけている「俺」の心情や様子が、たとえの表現を多用することで印象的に
描かれ、将来映画監督として活躍するであろうことを読者に確信させている。
- オ テンポの良い会話文によって話を展開させることで、母に死が近づいているという重くながちな
イメージをやらわらげ、作品の雰囲気をも深く、深みがあるものにしていく。

〔二〕 次の I・II の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I ために

自分で言ってしまうけれど、私は世界一のナマコ研究者だ……などと自慢しても、実は世界に一〇人くらいし
かナマコの研究者はいない。ナマコなど研究していると、よくこう聞かれる。「そんなもの研究してなんの意味が
あるの?」と。まさにおっしゃるとおり。私が研究しているのは食べるナマコではないし、ナマコの研究者がい
なくなっても、私も君たちも、そして世の中も、そんなには困らない。

A、やっぱり世界に一〇人くらいはナマコ研究者がいなくてはならない。ナマコは生物。私も生物、君
たちも生物。生物を知るためにはほかの生物も知らなければいけない。「皆さんもぜひ生物学者になろう!」など
とは言わないが、生物学を学ぶ意味はもちろんある。

君たちは今いろいろな科目を習っている。けれど、それが将来なんの役に立つのか?なんて考えたら、直接は
役に立たないかもしれないし、数学者にならないから数学は勉強しない、と開き直る人もいるだろう。しかし「数
という概念はとても重要なものだ。」

例えば、人間は一人ひとり個性が異なるかけがえのない存在だが、数えるとあなたと君と私で「三人」となる。
だから手は六本。「三」を普遍的に考えると $3 \times 2 = 6$ という数式が成り立ち、それに則^{のっと}っているいろいろなことを
考えることができる。手が二本と六本とでは、やれることに違いが出てくる。数式化できれば、とても便利で、
リングが落ちるのも、月が地球の周りを回るのも、同じように抽象化して考えて、ニュートンの運動方程式に則^{のっと}
て計算できるのだ。計算できるからこそ、りっぱな建物が建てられるし、ロケットを打ち上げることができる。

お米も牛乳も鉛筆もまったく異なる物質だけれど、お金⇄貨幣で買うことができる。鉛筆が一本一〇〇円、お

米が一〇キロで三〇〇〇円と値段を付ければ、お金という抽象的なもので交換が利く。そうでなければ経済学が成り立たない。「万物は数である」と言ったのは古代ギリシャの哲学者ピタゴラスだが、すべてを抽象的な数で考えたからこそ、貨幣経済が可能になったのだ。君たちがお金を出してものを買うことの背景には数学がある。今の社会でまともな人間として生きるには数学を勉強しなければならぬ理由はここにある。

同じように、君たちがまともな生き物として生きていくには生物学を学ばなければならない。自分自身を知るには、生物について勉強しなければいけないのだ。

Ⅱ 学問は「脳みそのパン」である

なぜ勉強するのか？ という問いに対して、ギリシャの偉大な哲学者であり生物学者の祖でもあるアリストテレスは「三つの知識」を考えた。①生活の必要のための知（実用の知）、②快樂のための知、③学問的（理論的）な知である。

「生活の必要のための知」とは、交通ルールを知らなければ自動車にひかれてしまったり、稲の生態やテンコウ、そして水をどう引いてくるかという土木の知識がなければお米をつくることもできない。お金を稼ぐにはなんらかの専門家にならなければいけないが、そのためには勉強しなければならない。これらはすべて生活に必要な、実用の知だ。

B、勉強は「快樂」につながるものでもある。スポーツを楽しむにはルールを学ぶことが必要だ。さらに、現代社会のさまざまな技術は、よりおいしく、より便利に、より快適に、という私たちの快樂に奉仕するものでもある。

そして、アリストテレスが「高貴なる知」と呼ぶ「学問的な知」がある。アリストテレスの著書『形而上学』

の冒頭には「すべての人は生まれながらにして知することを欲する」と記されている。知るとは楽しみなんです。知ることは安心への道でもある。自分がこの世の中でどういう位置を占めているのかを知ると安心できるが、ギャクに知らなければ不安が募る。知る楽しさをもとに、世界を知り、自分自身を知り、それによって世界の中での自分の位置を知る。これが学問の楽しさだ。

C 次に、なぜ生物学を含む科学を学ぶ必要があるのかをわかりやすく説明しよう。

私たちが生きていくためには、三つのパンが必要だと私は思っている。「体のパン」「心のパン」「脳のパン」だ。聖書に「人はパンのみにて生きるにあらず」という有名な言葉がある。パンを供給するための農学や経済学などを実学と呼ぶ。これが「体のパン」である。

しかし、私たちはパンがなければ生きていけないが、それだけでは満たされない。体だけでなく、心にもパンを与えなければ心が干からびてしまうだろう。そこで宗教や芸術といったものが「心のパン」に当たる。

三つめの「脳のパン」が理学部や文学部で行う学問だ。私たちの生活を便利にするためでもなく、たくさん食べ物をつくるためでもない。例えば、食べられないナマコを研究してもあまり役に立たないが、このような学問を「虚学」という。

虚しい学問なんてひどい呼び方だが、なぜこんな生き物が存在するのかを研究したりして、世のさまざまな物事について知ることが、すなわち自分の世界を広げることになる。これによって脳みそが快感を覚えるのだ。

③ 虚学とは霞を食って生きる学問である、と常々私は公言しているが、ほんとうに虚学なんかやっていてもお金はない。霞がなければ脳みそは枯れてしまう。君たちだって生きることとは関係なくとも、音楽が聴きたくなったり、絵画を見たくなくなったりするだろう。それが人間という存在だ。

理科なんて将来の自分の職業に関係ないから……なんて思ったら脳みそが偏った人間になってしまう。君たち

